

---

# アジとサンマとクローバー

仲村 歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アジとサンマとクローバー

### 【Nコード】

N1172Y

### 【作者名】

仲村 歩

### 【あらすじ】

突然の兄の訃報を母から受けて小笠原に行くと  
幼い女の子が泣きながら抱き着いてきた  
それが全ての始まりだった

## プロローグ

「しかし、暑いな……」

それが正直な気持ちだった。

東京では心地良い秋風がそろそろと吹こうかと言う9月の終わりなのに、ここは未だ夏の名残と言うよりは……

竹芝桟橋から船で揺られる事2.5時間半。

船はゆっくりと港に接岸しようとしている。

港には人や荷物を待ちわびた人が集まりにぎわっている。

6日に一度しか船は来ない。

どんな僻地かと思うかもしれないが住所的には東京都となっている。ため息を漏らしタラップを重い足取りで降りていく。

「パパ！」

少し離れた所から小さな女の子の声が桟橋に響き女の子が走り出した。

単身赴任か仕事の都合で離ればなれになっている父親との再会だろう。

辺りを見渡すと沢山の観光客に交じり見るからに仕事関係の人だろうと思える姿の人が見て取れる。

小さな女の子の声が泣き声に変わり。

足に小さな衝撃を受ける。

驚いて見下ろすと花柄のノースリーブの白いワンピースを着た女の子が俺の脚にしがみついて泣きじゃくっている。

潮風が吹き抜け女の子の色素の薄い肩まで伸びている髪が風に舞った。

それはお袋からの一本の電話から始まった。

俺は一応アパレル関係の会社で営業の仕事をしている。

一応と言うのは俗にいう窓際族なんて呼ばれている部類に含まれているからだ。

人件費削減や経費削減が叫ばれている中で、営業成績も下から数えた方が早く定時に出勤して定時に退社する様な俺が会社に残っていないのが自分自身でも不思議に思う。

が、決して転職なんて考えた事は無い。

就職難のご時世にぬるま湯に浸かっていられる幸せを噛み締めていたいからだ。

「おゝい、沢渡。沢渡典彰君、2番に電話だよ」

「すみません」

上司である水野課長に言われ机の上にある電話の受話器を取り点滅している2の番号を押すと沈んだ様なお袋の声がした。

「ノリちゃん？」

「お袋、会社でノリちゃんは止めてくれ。何か用か？」

本来なら携帯に掛けてくれば用は済む事だが、俺が実家からの電話に殆ど出ない事を見越して会社に掛けて来たのだろう。

そしてお袋の口から信じられない言葉が発せられた。

「宗ちゃんが死んだ」

「はあ？ 何の冗談だ。昨日の夜に電話で喋ったばかりだぞ」

「修理中のアンテナの資材が落ちてきて宗ちゃんに……」

「おい、お袋！」

受話器の向こうでお袋は泣き崩れてしまった。

これ以上お袋から事情を聴くのは無理だと判断し、一旦通話を止めて昨夜掛ってきた履歴から宗一の携帯を呼び出す。

すると機械的な声で電源が入っていないか電波の届かないと告げら

れた。  
堪らず営業部を飛び出して唯一テレビのある社員食堂に駆け出していた。

廊下を重い足取りで営業部に戻る。

握りしめた携帯が着信を知らせ友人や知人から宗の事を告げられ、真実を受け入れる前に何度も再認識させられた。

営業部に戻り課長に事の次第を告げる。

「沢渡君、急に如何したんだ？」

「すみません。取り乱して実は仕事中の事故で兄が亡くなりました」

「何と言えば良いか。こっちは事は任せて早く帰りなさい、総務には忌引の手続きをしておくから。確か君のお兄さんは小笠原で」

「はい」

「それじゃ時間が掛るだろう。戻ってきてから有給の手続きが出来るように取り計らっておくから」

「ありがとうございます。それじゃ失礼します」

自分のデスクに戻り同僚に頭を下げて営業部を後にする。

昨夜の宗一からの電話は突然の物だった、虫の知らせと言うやつか。電話では何か煮え切らない奥歯に物が挟まった様な感じで、何かを俺に相談したかったのかもしれないが今はもう聞く事すら出来ない。後ろから同僚が課長に抗議している声が聞こえてきた。

「課長、何で沢渡を庇うんですか？ あんな営業部のお荷物なんて」

「それじゃ、君は沢渡君が作った記録を塗り替える事が出来るのかな？」

「それは…… それにそんな記録さえ本当か」

「四の五言わずにそれを越えようとする事がひいては当社の成長を促すのでは？」

「判りました。あんな記録無理だろう、勝ち逃げ野郎が」

会社から直で兄の家に向かう。

兄の家は新興住宅地の中にある小綺麗な一戸建てだった。表札に能登島の名前がある。

インターフォンを鳴らすと兄の愛娘である可奈ちゃんドアを開けてくれた。

「ああ、ノリだ。ママ、お婆ちゃん、ノリが来たよ」

姪の可奈ちゃんの声でお袋が出迎えてくれた。

「意外と早かったのね」

「あんな、電話口で泣き崩れたお袋が言う言葉か」

リビングに行くと兄の奥さんである一つ年上の美紀みのりさんが放心状態でソファに座っていた。

「今、お茶でも」

「冷たいのをくれよ、喉がカラカラだ」

「はいはい」

こんな時にはなんて声を掛ければいいのかだろう30年生きて来ても戸惑ってしまう。

大丈夫の筈も無ければしっかりしてとも言えずだんまりを決め込むしか出来なかった。

全く現実味が無く平坦な時間が流れている。

それはあまりにも遠い場所で起きた事だからだろうか。

ニューヨークまで12時間ちよいハワイまでなら7時間で着いてしまう。

それなのに兄貴がいる場所は日本国内なのに25時間以上かかってしまう。

「ノリは何時まで居るの？」

「可奈ちゃん……」

「はい、冷たい麦茶」

「サンキュー」

お袋が持ってきてくれた麦茶を一気に喉に流しこむ。

可奈ちゃんは何も判らずに俺の横に座り嬉しそうに足をブラブラさ

せていた。

お袋と俺が遊びに来たと思っっているのだろう。

確かに6歳の子どもに父親が死んだなんて理解できないだろうし、ましてや父親と毎日顔を合わせていた訳じゃない。

単身赴任先で死んでしまつて死に顔さえ見る事は不可能だったのだから。

「典彰君、来てくれたんだ」

「義姉さん、当たり前でしょ」

「そうだよ。何だか実感が無くて悪い夢を見ているみたいで」

ここにも夫の死を受け入れられない人がいる。

理由は可奈ちゃんと同じ様なものだろう。

「お袋、義姉さんの両親は？」

俺の問いにお袋は何も言わずに首を横に振った。

美紀さんみのり方の家族とはほぼ絶縁状態になっている。

時々美紀さんが近況を電話で報告していると聞いた事はあるけど年下の兄と結婚話が持ち上がった時に反対され、美紀さんが半ば強引に兄の所に転がり込むように結婚してしまった。

その事に責任を感じた兄は能登島の姓を受け継いだ。

「ノリ、あんたが島に行つてきなさい」

「はあ？ お袋は何を言っているんだ？ 会社は？」

「忌引と有給を引つ付ければ良いじゃない。あんたが行かなきゃ誰が宗ちゃんを迎えに行くの」

「典彰さん、私からもお願いします」

「美紀さん……」

美紀さんは極度の乗り物酔いをするので1度だけ島に可奈ちゃんを連れて行った時には大騒ぎになった。

お袋が親父がと思つたが美紀さんがこの状態じゃお袋は無理だし、

親父は……も無理か。

押し切られる様に自宅に戻り準備を始め、パソコンで島までの経路を調べてみる。

「船って6日に1便……」  
慌てて船会社に電話して俺は船上の人になった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1172y/>

---

アジとサンマとクローバー

2011年11月2日02時11分発行